

倭王武は百済武寧王が若い頃に日本列島にいたときの候王としての称号

水野健一

中国の史書には倭の五王についての記述があり、それらが日本の記紀にある天皇の誰にあたるかが論争になっています。

しかしそれらは全て徒勞であったことがわかりました。

具体的にはタイトルにあるように倭王武とは百済の武寧王のことでした。

候王とは大王に対する言葉。

百済国は王ではなく大王、なぜかというと日本列島の各地に百済の王族が治める諸侯の国があり、それをまとめる王だったから。

唐突過ぎてわからない人も多いかと思いますが、このことは事実らしく他の候補では矛盾が出ていたことが解消され全てのパズルのピースがはまり始めます。

まずは当時の百済と日本列島の中に在った倭国との関係を整理しないといけません。

百済の王家は朝鮮半島の中部に都を持ち、そこで代々継承されていましたが、やはり後継者争いは怖いものです。

日本でいうと室町幕府の足利家は後継者争いを未然に防ぐために、将軍にならなかった男子を出家させて寺に入れ、争いが起こらないような状態にしておき、宗家になにかあったときには還俗させ後継を絶やさないようなシステムを構築していました。

百済にもそのシステムがありました。

それが百済本国と倭国です。

倭国には傍流の王子が送られそこで百済の衛星国として生活、開拓し、本国でなにかあったときには呼び戻されていました。

事実はこちらなのですが、百済が滅亡後に編纂された日本書紀には倭国が主で百済が従というように書き換えられてしまいました。

本来の百済が主、倭国が従、この視点で倭の五王を探すとすると日本書紀は関係なくなってきました。

百済の王の系譜を見て、王が本国で即位する前に倭国で王だった可能性のある人を探せばいいのです。

ヒントとなるのは倭王武の 478 年の宋への遣使です。

ここでは父や兄がにわかになくなり高句麗へいつか攻め返してやるという内容の上表文がありました。

なぜなら 475 年に百済の首都漢城は落とされ当時の王、蓋鹵王とその后そして王子は高句麗軍に殺されていたからです。

また 477 年には百済の王族昆支や文周王が立て続けに内紛で殺されています。

このような状況なので日本にいた若い頃の武寧王は高句麗への復讐に燃え、高句麗への攻撃の意志を宋に事前報告したのです。

まとめると武寧王は 462 年に各羅嶋で生まれ父の昆支が本国へ呼ばれると後を継いで倭王になり 478 年に宋へ遣使します。その後 502 年に本国に戻り百済の王となり高句麗への進攻を始めます。そして実績を残して公州市の武寧王陵に葬られるのです。

この視点で他の倭王も探していくと

興は昆支、済は蓋鹵王、というあてはめができるようになります。

蓋鹵王と昆支は兄弟説、親子説があるのですが、倭王済→興→武は兄弟間ではなく、親子間できちんと代替わりしているとすると、

蓋鹵王、昆支、武寧王は祖父、父、子という系図が確定できます。

残る讚と珍ですが、基本倭へ派遣される百済の王族は側室の子や正室の次男以降となるようなので讚や珍が百済で王位に就いていないとその名前を探すのは難しそうです。

ありがとうございました。

西暦	中国王朝	倭王	百済王				
413年	東晋	讚?	腆支王				
421年	宋	讚	久尔辛王				
425年	宋	讚					
430年	宋	?	毗有王				
438年	宋	珍		この時代の倭隋が蓋鹵王の可能性あり			
443年	宋	済					
451年	宋	済					
455年			蓋鹵王即位				
460年	宋	?	蓋鹵王				
462年	宋	興	蓋鹵王				
475年10月				漢城陥落蓋鹵王死去			
			文周王即位				
477年4月			文周王	昆支が佐平に			
477年7月			文周王	昆支暗殺			
477年9月				文周王暗殺			
477年9月			三斤王即位				
477年11月	宋	武?	三斤王				
478年5月	宋	武		上表文			
479年	南斉	武		王朝交代、武、事務的任官			
479年11月				三斤王死去			
			東城王即位				
501年12月				東城王死去			
502年			武寧王即位				
502年	梁	武	武寧王	王朝交代、武、事務的任官			
521年			武寧王	武寧王高句麗討伐を報告			
523年				武寧王死去			